

シリーズ 韓国の教育問題 2

教科書フォーラム 『代案教科書韓国近現代史』を読む

日本福祉大学教授
三橋 広夫

私の手元に『代案教科書韓国近現代史』（以下、「フォーラム教科書」という本がある。日本語にはまだ翻訳されていないが、本書をめぐってはさまざまな問題が引き起こされてきた。本書を批判的に読むことによって現在の韓国の歴史教育が抱えている問題の一片でも明らかになれば幸いである。

教科書フォーラムとは

本題に入る前に、編者である教科書フォーラムについてふれる必要があるだろう。金星社版韓国近現代史教科書の記述などをめぐって熾烈な攻防が繰り返されてきた2004年11月に自由主義連帯が結成された。自由主義連帯は「国民的叡智を集めて先進国の建設へと邁進すべきこの無限競争の時代に、盧武鉉政権は自虐史観を撒き散らし、支配勢力の交替と既存秩序の解体のための「過去との戦争」に自分の命運をかけている」（創立宣言文）と唱え、代案を示すために教科書フォーラムを立ち上げた。2005年1月創立の教科書フォーラムは「韓国現代史60年を卑下して自虐する傾向」を憂い、「あらゆる理念的偏向や政派的利害も排撃し、ひたすら正確な史実と公正な史観のみを追求する」と主張しているが、その本質は前半の主張にあるといえる。すわなち、現行教科書（当時）はすべて「大韓民国の歴史を否定的に見る自虐史観である」から、それを正さなければならないとするのである。

したがって、教科書フォーラムが歴史学あるいは歴史教育において新しい視座や方法を提起するグループではなく、きわめて政治的な、それも現李明博政権を補完する保守的なグループであることは明らかである。ただし、全体としてはそうであってもさまざまな潮流が内在しているため、ここでは「フォーラム教科書」の記述と李榮薫同フォーラム代表（ソウル大教授）の主張を主に取り上げる。

「フォーラム教科書」は「代案教科書」ではない

私は、なかまたちと『躍動する韓国の歴史』（明石書店、2004）を翻訳・出版した（原題を『生きている韓国史教科書』という）。それは、韓国の教師（全国歴史教師の会）たちが、目の前の子どもたちに「無味乾燥な国史教科書、子どもたちに歴史を学ぼうとさせない国定教科書を批判して生き生きと歴史に出会えるようにと期待しながら執筆することを意図している」（訳者あとがき）と判断したからだった。子どもたちと接している教師が子どもたちの目線で教科書を執筆することは、韓国ばかりか日本も含めた多くの教師たちの願いでもある。また、こうした教科書が世に出ることは、複数の視点で歴史を見ることを期待したからでもあった。これこそが代案なのではないだろうか。

また、教師や子どもたちは教科書の叙述をそのまま受け入れることはない。彼ら／彼女らのさまざまな経験などによってさまざまに認識され、新たな記憶として歴史が再生産され、その営みは主体的でなければならない。その営みに寄与するのが教科書の役割であり、したがって子どもたちのさまざまな認識形成を前提として叙述されるべきだと考える。教科書フォーラムは、「フォーラム教科書」こそが韓国の正史だと主張する点で、このことを考慮していない。

こうした二重の意味で「フォーラム教科書」は代案教科書にはならないといえる。付け加えると、韓国は検定制度を採っており、両者ともに「教科書」と銘打ってはいるが、教科書として出版されているわけではない。

際立つ植民地近代化論

では、具体的に記述を見てみよう（「フォーラム教科書」からの引用はページのみ記述）。

「1876年の開港以後、1945年の日帝（日本帝国主義—引用者）の抑圧から解放されるまで韓国近代史は大きく見ると西洋起源の近代文明が移植され、定着する過程だった。植民地期には日本から私有財産制度が導入され、市場経済が発展した。しかし植民地期は自由民主主義の政治制度とは無関係だった。民主主義政治制度が韓国に移植されたのは解放後南韓（南朝鮮—引用者）に進駐したアメリカを通してだった。」（p.149）

この数行に込められた意味は大きい。日本の植民地支配は私有財産制度の導入と市場経済の発展の時代として描かれるからである。

土地調査事業をめぐる記述ではそれがはっきりと現れる。「日帝は韓国を併合してから 1918 年まで朝鮮土地調査事業を実施した。この事業は土地の面積と形態、位置を調査し、等級と価格を査定し、所有権者を確認する目的で施行した。これを通して日帝は土地の財産権制度を確立し、地税を安定して受け取れる基盤を整え、農村開発の基礎を確保しようとした」(p.84) という記述からは、この事業は「財産権制度の確立」を通して「農村開発の基礎の確保」をすることを目的としていたかのように読める。さらに、「土地申告」というコラム (p.85) で「農民の所有権意識もかなり高かった。そのため総督府は簡便な行政手続きによって全国の土地の所有権者を調査できたのである」と付け加えている。ここには、民族矛盾を見て取ろうとする視点はない。義兵運動などに示された朝鮮人の怒りや、土地調査事業時に農民たちが申告をするかどうかで悩んだことなどを無視し、ひたすら農村を発展させる政策として把握するだけである。

そして、コラム「植民地韓国人の生活水準」(p.98) では、植民地時代に日帝の収奪によって韓国人の生活水準が劣悪だったとする従来の記述は間違いであると指摘する。1920 年代の産米増殖計画によって朝鮮の米が「日本に収奪されたのではなく、経済の論理によって日本に輸出され……その結果、日本人を含む韓半島（朝鮮半島—引用者）の所得全体が増加した」「米の一人あたり消費量が減少しているのは事実だが、雑穀など代用食品……を総合して考えると、一人あたり熱量摂取が減ったとは断言できない」としている。朝鮮農村が貧しかったのは、植民地の問題ではなく、農村の過剰人口にその原因を求める。そして、「韓国の農村過剰人口が解消されて住民の生活水準が実質的に改善されたのは、1970 年代半ば（朴正熙時代——引用者）だった」という。ここに「フォーラム教科書」が主張したい結論が見える。

民衆の運動を無視する

「東学農民蜂起は既存の体制を否定した急進的な革命だったというよりも、儒教的な勤王主義に立脚して庶民の経済生活を安定させようとしていた復古

的な改革の性格が強かった。」(p.45)

このように東学農民運動は「蜂起」であり、開港以前からの「民乱」の終点だったとする。つまり、東学の運動を開港以前の「民乱」の段階に留めておくことによって、取るに足らないものとしていくのである。したがって、執綱所などの弊政改革については一言もふれない。

では、独立運動についてはどう記述しているだろうか。さすがに 3・1 独立運動を無視するわけにはいかず、「民族意識の成長」「3・1 運動の背景と準備」「3・1 運動の展開」「3・1 運動の理念」から「大韓民国臨時政府の樹立」へと記述が進められ、堤岩^{チエラム}里虐殺事件についても側注ではあるがふれている。これらの事実が韓国人の認識のコンセンサスになっていることがわかる。

だが、ここにさりげなく「3・1 運動は第 2 次世界大戦以後、韓国人が国際社会に助けられながら日帝から解放され、独立国家を建設する土台を整えた」という記述を入れている。

もう少し説明すると、韓龍雲^{ハンヨンウン}（3・1 独立運動の指導者の一人—引用者）が日本の朝鮮支配を批判し、朝鮮独立の当為性を主張したのは、……自由の論理によって」（李栄勲『大韓民国の物語』、文芸春秋、2009）だと述べる。なぜ韓龍雲がこうした精神世界を獲得したのか。「中華文明圏という文明圏の一部に位置していた朝鮮文明が、自由こそが人間の本性だと悟り、個人を究極の実体として求める西洋文明圏に包摂されていく、そうした大転換」（同前）を理解したからだという。ここにポイントがある。

イスンマン 李承晩・朴正熙をもちあげる —エリート中心主義

「開化期と植民地期に民族意識を自覚し、近代文明を学習・実践してきた民族的近代化勢力と、解放以後アメリカに伴って入ってきた自由民主主義国際勢力の結合によって大韓民国が成立した。以後、6・25 戦争を経て 4・19 民主革命に至る期間は共産主義勢力の挑戦を退け、国家の基礎を自由民主主義体制として確立する建国の第 1 段階だった。」(p.134)

「フォーラム教科書」の解放認識はここに現れる。開化派をもちあげ、植民地時代に近代化が進んだことを評価するのは、その近代化が達成される李承晩・朴正熙政権を評価するためだとも読める。

つまり、「大韓民国建国に際し、初代大統領李承

晩の功労がきわめて大きかったことは、改めて述べる必要も」なく、「韓国の近現代史において大韓民国の建国とは、李承晩を主たる代理人とする開化期以来の文明開化派によって導かれた」（李栄勲、前掲書）とするのである。

そして、「5・16以後、韓国は経済、社会、文化のあらゆる面で近代化革命というべき急激な変化を味わった。歴史的に蓄積された成長の潜在力が爆発した」（p.180）とする。ここでは、朴正熙の行動を「5・16 クーデター」と記述しながらも「クーデターの成功と初期改革」やコラム「革命公約」を取り上げ、経済成長に論を移すことによって肯定的に評価し、それを「近代化革命」としてくくる。先に述べた、朴正熙の時代に農村過剰人口が解消されるという記述がこれを裏付ける。

さらに、「政治機能面で5・16 クーデターは近代化という国民的課題を遂行する能力が欠如していた旧政治勢力とそれに挑戦した急進理念の勢力をともに代替した新しい勢力が国家権力の中心部を掌握した一大変革だった。……彼ら（クーデター勢力—引用者）は、当時の客観的な現実において経済発展こそもっとも至急な国民的課題であることを認識していた」（p.181～182）という記述は、朴正熙らが掲げていた論理の再版である。

「神話としての民族」

また、李栄勲代表は民族主義を「神話」として退ける。民族主義に対する批判が、それが持つ排他性、排除と差別の論理、他者化に対する批判が込められている限りは価値を持つ。しかし、「フォーラム教科書」のそれは、統一を求める志向やその教育、あるいは北朝鮮の歴史を韓国史から排除する役割を担っている。

さらに言えば、「民族」を韓国史から消し去り、植民地時代をひたすら市場経済の基礎を築いた時代と見て、その人的資本が大韓民国に継承されたと見るならば、「親日派」も当然問題とされない。

「反共ならば愛国」と豪語していた李承晩や、植民地時代に高木正雄と名乗り、日本の陸軍士官学校を卒業して満州国軍中尉として敗戦を迎えた朴正熙のその後の行動を評価するには、親日派の問題を避けて通れない。しかし、親日派であったことがさして問題とならないとすれば、二人の評価にとってはきわめて都合のよい論理となるだろう。

こうして「フォーラム教科書」の記述は限りなく「つくる会」の論理に接近する。「つくる会」が日本の侵略戦争に対する反省を「自虐史観」と罵倒したように、「フォーラム教科書」は分断政府の樹立と軍事独裁に対する批判に「大韓民国は間違っって作られた国」（李栄勲、前掲書）なのかと問いつめるのである。

子どもたちにとってよい教科書とは

日韓の高校生たちは交流しながら次のように考えた（韓国・中京高校歴史探究サークル『韓国高校生の歴史レポート』、明石書店、2006）。

「日本の高校生たちは愛国心について否定的な認識を持っています。学校で愛国心を持たせるため国歌を歌い、国旗を掲げることにについて多くの高校生は賛成しようとしません。韓国では愛国心を持つことについてどう思っているのか。そして学校で愛国心を学ぶ時間があるか知りたいです。」（日本の高校生）

「歴史は鏡だ。韓国の高校では歴史の最初の時間に歴史は鏡だと習う。私たちは鏡を見て顔についたものを取るように、私たちは歴史をかえりみて現実の問題点を解決し、また歴史の汚点を繰り返さないために歴史を学ぶのだ。」（韓国の高校生）

「在日の中にはさまざまな人がいますが、自分が自分としての存在感を感じて、常に自分自身を肯定的に考えながら生きることができたらいいなと思います。私は自分自身と親を否定しながら生きてきたので、子どもたちはそうでなければいいなと思います。」（朴栄子^{パクヨンジヤ}、在日韓国人）

この高校生たちや在日韓国人の真摯な問いに答える、あるいは教科書を読みながらさらにさまざまな問いが生まれ、友だちと話し合いたくなる歴史教科書こそ子どもたちの求めているものではないだろうか。

参考に

教科書フォーラム『代案教科書 韓国近現代史』、キッパラン、2008、韓国語

歴史教育連帯会議『ニューライトの危険な教科書を正しく読む』、西海文集、2009、韓国語

李栄勲『大韓民国の物語』、文芸春秋、2009

韓国・中京高校歴史探究サークル『韓国高校生の歴史レポート』、明石書店、2006

趙寛子『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環』、有志舎、2007

宮嶋博史ほか編『植民地近代の視座』、岩波書店、2004

金富子／中野敏雄編著『歴史と責任』、青弓社、2008